

2023年4月30日佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書1章1～17節

説教題：なぜ系図から…

カナダの神学校で日系3世の先生に教えて頂きました。「マタイ福音書5～7章・111節」の「山上の説教」を全部暗記しておられた先生です。そして色々な小道具を使って「山上の説教」を「説教」する方でした。「右の手があなたをつまづかせるなら、切って、捨ててしまいなさい」(5:30)と説教しながら、手の玩具が飛んで行くのです。凄い説教でしたが、昨年末、その先生が亡くなったと聞いて、ショックを受けたことでした。まだお若かったのですが…。その先生が教えて下さったことで、特に印象深く覚えていることの1つは、私達の霊的な祖先であるアナバプテストの聖書の読み方です。先生によれば、アナバプテストは「聖書」の中でも「山上の説教」を特に大事にしたそうです。昨年11月の「アナバプテスト・セミナー」でそのことを参加者の方々にお話ししながら、佐土原教会でも、もう1回、「山上の説教」をじっくり学びたいと思ったことでした。それもあって、今朝から「マタイ福音書」をまた学んで行きたいと思います。

0：イントロダクション

初めにイントロダクション的な話をします。「マタイ福音書」は、12弟子の1人マタイによって書かれた「福音書」です。特徴は「ユダヤ的な色彩が強い」、もっと言うと、ユダヤ人に「イエスこそがユダヤ人が待ち望んでいた『メシア(救い主/キリスト)』であることを確信させるために書かれた」と言われます。だから「マタイ福音書」には「旧約聖書」の引用も多いし、「(これは)主が預言者を通して言われていたことが実現(成就)するためであった」(マタイ1:22)という言葉が何度も出て来ます。しかし一方、「マタイ福音書」は、「四福音書」の中で唯一、「教会」という言葉が出て来る「福音書」でもあります。だから「教会の福音書」とも呼ばれます。教会に語られているということです。そしてまた「マタイ福音書」は、『ユダヤ人の王』としてのイエス…というか『真の王としてのイエス』を描こうとしている」とも言われます。その意味では、ユダヤ人だけではない、教会だけでもない、この世界に生きる全ての人に向けて書かれている「福音書」だということになります。今朝は、1章1～17節を学びます。「内容」と「適用」に分けてお話します。

1. 内容

「新約聖書を読もうとする人が一遍に読む気を無くしてしまう」と言われるのがこの箇所です。なぜマタイは、「福音書」をこのような系図から始めたのでしょうか。この系図は何を伝えようとしているのでしょうか。

1) 主イエスは『旧約』に預言された救い主である

なぜ系図から始まっているのか。それは、ユダヤ人は、その人がどのような人なのか、どのような背景を持った人なのか、それを系図で示そうとしたからです。そのような背景の下に「マタイ福音書」も系図から書き始められているのです。私達には意味がないように見える系図ですが、「旧約」の歴史を知っていたユダヤ人にとっては、大きな意味を持ったのです。

系図の最初に「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」(1:1)と表題がついています。マタイは、この系図を通して「救い主であるイエスは、アブラハムの子孫であり、ダビデの子孫であること」を示そうとしていることになります。では、イエスがアブラハムの子孫であり、ダビデの子孫であるとは、どういうことでしょうか。

アブラハムは、「創世記」に登場する、ユダヤ人が「民族の父、信仰の父」と慕い、誇っていた人物です。素晴らしい信仰に生きた人です。そのクライマックスは、息子のイサクを神様に捧げる場面です。神の命令に従い—(それはテストだったのですが)—待ち望んで与えられた息子でも神に捧げようとするのです。そんな彼をご覧になって、神は彼の信仰を喜ばれるのです。アブラハムは、

その経験を通して「主の山に備えあり」(創世記 22:14)、「神に従う時、神が備えて下さる」という信仰を得るのです。彼は、その信仰によって、神を喜ばせた人です。しかし、アブラハムについてより重要なことは、神がアブラハムと「祝福の契約」を結ばれたということです。神はアブラハムに言われました。「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」(創世記 12:2~3)。「あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる」(創世記 22:18)。神学校で受けた「モーセ五書—『旧約』の最初の5つの本」の授業の教科書には『モーセ五書』のテーマは『アブラハムのようにあれ!』ということである」とありました。神は彼の信仰を喜び、「アブラハムの故にアブラハムの子孫を祝福する」と言われ、「アブラハムの子孫によって地の民は祝福を受ける」と言われたのです。ユダヤ人にとって「神の救い主(メシア/キリスト)」が登場するなら、「アブラハムの子孫」から出なければならなかったのです。

さらにアブラハムから 1000 年後、神はアブラハムの子孫に祝福の再確認をされます。その子孫がダビデです。ダビデはユダヤ人にとって「イスラエルに繁栄をもたらした理想的な王様」でした。しかしダビデについても重要なことは、神がダビデに「祝福の契約」を与えられたということです。「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる…わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる…」(IIサムエル 7:12~14)。神は、アブラハムからダビデへと続く流れを選び、「ダビデの子孫を永遠の王として立てて祝福する」と語られました。イスラエルの人々にとって、アブラハムは「信仰の父」であり、ダビデは「理想的な王」でした。やがて国が2つに分裂し、さらには外国によって滅ぼされる。しかしその中で預言者は語りました。「その日、わたしは、ダビデに1つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行う。その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む…」(エレミヤ 23:5~6)。そして人々は、やがて「アブラハムへの祝福の約束」が実現し、「ダビデへの神の約束と預言」が実現すること、つまり「アブラハムの子孫として、ダビデの子孫として、民を苦しみから救い出す救い主(王)が登場する」ことを待ち望んでいました。そのような中で、実際にイエスは「アブラハムの子孫、ダビデの子孫」として生まれて来られたのです。この系図は、ユダヤ人に「イエスこそが、『旧約』に預言された、ユダヤ人が長い間待ち望んでいた救い主である—(真の王である)」ということを示すようとするのです。そのことをユダヤ人に示そうとするなら、系図を示すことが最も相応しい方法だったのです。

2) 人には主イエスという救い主が必要である。

しかしこの系図には、本来ならば名前が出てこないはずの人達が出て来ます。3節の「タマル」、5節の「ラハブ」と「ルツ」、6節の「ウリヤの妻—(バテ・シェバ)」の4名の女性です。本来ユダヤ人の系図には、女性は登場しないのです。この4人はどういう人達だったのでしょうか。

タマルは、娼婦の姿に身を窶して自分の舅を騙すようにして舅との間に子供をもうけた人です。ラハブは、異邦人の遊女—(娼婦)—だった人です。ルツは、「ルツ記」に登場する人ですが、これも異邦人—(モアブ人)—です。モアブ人は、ユダヤ人がもっとも忌み嫌った民族の1つです。さらに「ウリヤの妻」とは、ご存知の「バテ・シェバ」です。ダビデと姦淫の罪を犯し、やがて自分の夫が戦争で死ぬと、ダビデの妻に納まった人です。さらにユダヤの伝承では、「タマル」も「バテ・シェバ」も異邦人です。要するにこの4人はいずれも、救い主の系図を飾るに相応しいとは言えない人々なのです。なぜマタイは、敢えてこの4人の名前を入れたのでしょうか。

ユダヤ人は「自分達はアブラハムの子孫である」、「神に選ばれた民である」という血筋を誇っていました。そして異邦人を激しく蔑視していました。しかしマタイは、「約束の救い主」に至る系図に、既に異邦人がいることを示し、「ユダヤ人が純粋な民族だから救われる、その血が人々を救う」という考え方を否定しようとしているのだと思うのです。

そしてそれ以上に、4人の女性の登場によってクローズ・アップされるのは、この系図の中にある乱れです。「タマル」の出来事にしても、「バテ・シェバ」の出来事にしても、女性達の罪というよ

りも、むしろ女性達を取り巻く男達の罪なのです。系図の中心にいるのはダビデです。後の人々は、約束の救い主を「ダビデの子」と呼んで待ち望みました。確かにダビデは、一面ではそのような人です。しかしここには「ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ」(6)とあるのです。ウリヤの妻(バテ・シェバ)は、ウリヤの死後、正式にダビデの妻となります。彼女がソロモンを生むのは、正式にダビデの妻になってからです。だからダビデは、「ウリヤの妻」と書かれることに納得がいかない、「バテ・シェバは、私の妻になったのだ」と言いたいところでしょう。しかし、マタイは言うのです。「いや、バテ・シェバは、あなたの妻ではなかった。別の男の妻だった。それをあなたは奪ったのだ」と。それが「ウリヤの妻によって」と言うことです。

系図の中心的な存在であるダビデ。しかしここではむしろ、人間の罪の現実を示すのに中心的な役割を果たすのです。最初の14代は「ダビデの登場」まで、次の14代は「ダビデの後の王達の歴史」です。しかし「旧約聖書」を読むと、その歴史は、罪にまみれた歴史です。その「罪の刑罰」として「バビロン捕囚」があるのです。そして3つ目の区分になると、もう「旧約聖書」の中に名前を探すことさえ出来なくなります。言い換えれば、罪の中に沈んでしまうのです。その意味でこの系図は、「人の罪の歴史」を語るのです。「人間の歴史が—(ユダヤ人が誇っていたアブラハム、ダビデに続く歴史も)—どんなに罪にまみれたものであるのか」、「結局、自分達の力では立つことが出来ない歴史であったこと」を語るのです。

私達も、そうではありませんか。自分の力で祝福の人生を歩むことは出来ない。自分1人の人生さえ、様々に汚しながら、罪を重ねながら、自分自身も、そしてある場合には周りの人をも傷つけながらでなければ歩めない、それが私達ではないでしょうか。しかしだからこそ、私達では立つことが出来ないからこそ、人間は「救い主」を必要とする、私達は「救い主」を必要とするのです。そのことをこの系図は語ろうとするのです。

この系図(歴史)における救いは、「アブラハムに与えられた『神の祝福の約束』の故にアブラハムの子孫がそれでも守られている」ということです。「ダビデに与えられた『神の約束』の故に、ダビデが罪の男でも、その生涯が守られ、その子孫が守られている」ということです。「神の祝福」だけが、人間の「希望」として描き出されるのです。その意味で、人は神に—(神の祝福に)—結びつかなければならないのです。それが救いです。しかしそれは、ユダヤ人が考えていたように、ユダヤ人の血が人を神に—(神の祝福に)—結びつけるのではないのです。人が立派に生きるから、神に結びつくのはないのです。人は罪に沈んで行くのです。しかしその人間のために、神が備えて下さった方法は、「その人間の罪の歴史を—(私達の罪の歴史も)—引き受けるかのように、低く生まれて下さったイエス・キリストを信じる」という方法なのです。ある牧師が1章23節の「インマヌエル、神われらと共にいます」(マタイ 1:23)という御言葉について次のようなことを言っています。「わたしたちが神のもとに登るのではありません。神がわたしたちのところにくだられたのです。神の愛はわたしたちに向けて身をかがめるものです」。人間の歴史の一番低いところにイエスが下って来て下さった。私達の歩みの一番醜いところに、イエスが来て下さったのです。(私も泥沼の中から引き上げてもらいました)。そして私達に神の赦しを取り成して下さったのです。そのイエスを「『私の救い主—(私の罪を赦し、私を神と結びつけて下さる方)』と信じる」という方法、それによって私達は神とつながり、神の祝福に繋がる事が出来るのです。それが神の備えて下さった方法でした。イエス様を信じることによって、私達も、アブラハムの子孫に与えられた神の祝福の約束に与る者となるのです。そして、私達がどんな者であっても「神の祝福の約束」が必ず私達を守って行くのです。そのような生涯を歩むことが出来るのです。

2. 適用～主イエスを王とする

今「私達はイエスを信じる信仰によって、神と結びつき、アブラハムの祝福に与る者になって行く」と申し上げました。では、「主イエスを信じる」とはどういうことなのでしょう。『マタイ福音書』は、イエス様を『預言された救い主』として描くと同時に、『ユダヤ人の王—(いや全ての

人の真の王』として描く」と申し上げました。その意味で「マタイ福音書」における信仰とは、「イエスを王として迎える」ということなのです。「王として迎える」とはどういうことでしょうか。

「イエスを『王』とする信仰」、1つだけ…。水曜集会で「創世記」を学んでいます。5章に「エノク」という人が登場します。「エノクは神とともに歩んだ」(創世記5:24)、「彼(エノク)は神に喜ばれていることが、あかしされていました」(ヘブル11:5)と記されています。私はこれらの言葉を読んで、この前もご紹介した三浦光世さんの話を思いました。そして「イエス様を『王』として生きる」、その生き方を教えられる気がしました。

三浦綾子さんが、一千万円懸賞小説に応募するために一年がかりで「氷点」を書いていました。小説の締め切りが迫って来た年末、恒例の近所の子供達を家に呼んでのクリスマス会の準備の時期になって、「今年だけはクリスマス会を延期しましょう」と言う綾子さんに、光世さんは言いました。「神の喜び給うことをして、落ちるような小説なら、書かなくても良い」(三浦光世)。「原稿は返って来ない応募規定なの、コピー—(手書きのコピー)—を取らなければならないの」と反論する綾子さんに、光世さんは言いました。「入選するに決まっている原稿のコピーなど要らない」。実は光世さんには、御言葉が与えられていました。「祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります」(マルコ11:24)。この言葉を本気で信じたのです。クリスマス会は予定通り行われ、「氷点」は12月31日未明に完成し、2人は神様に感謝を捧げました。「もしこの作品をよしと見た給うならば、世に出してくださるように」。結果的に「氷点」は一等入選しました。光世さんは綾子さんに言いました。「綾子。神を畏れなければならないよ。この土の器も、神が用いようと思われる時には、必ず用いて下さるのだよ」(三浦光世)。

イエス様を「王」として迎え入れるとは—(私も、自分がどれだけそこに生きることが出来るか、自信はないのですが、しかし)—「現実が現実、信仰は信仰」、そういう生き方ではない、現実の問題の只中で「王」の御言葉に信頼して、本気で受け止め、身を低くして聞き従って行く、そういうことなのではないでしょうか。その時に、王だけが、イエス様だけが、与えることが出来る祝福が私達にやって来るのではないのでしょうか。私達もイエス様を信じることによって、神の祝福に繋がる者とされる(た)のです。ある牧師が言いました。「イエスをあなたの『王』として生きることを求めなさい。そして人生の中に、問題の中に王なるイエスを迎え入れて歩みなさい。そうすれば王なるイエスがあなたを祝福して下さる。あなたに神の祝福を与えて下さる」。私達も「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリスト」を「私の王」として迎えて、その「王」が下さる真の祝福を経験させて頂きましょう。